

26. 放射線治療患者における Ferritin, CEA による臨床経過の評価

戸上 泉 竹田 芳弘 平木 祥夫
江添 弘 中村 哲也 上田 裕之
森本 節夫 青野 要 (岡山大・放)
杉田 勝彦 (同・中放)

1) 放射線治療患者の血清フェリチン値を測定したところ、肝・胆のう癌、乳癌、悪性リンパ腫、肺癌で高値を示すものが多かった。

2) 原発性肺癌において、血清フェリチンを CEA と併せ検討したところ、次のような結果になった。①フェリチンは、小細胞癌で陽性率、高値例が多かったが、CEA は腺癌に高値例が多かった。②フェリチン値と CEA 値との間には明らかな相関は認められなかった。③フェリチン値は、臨床病期との間に相関を認め、特に 500 ng/ml を超える高値群では、転移が認められた。④ CEA でも転移群に高値を示す例が多かった。⑤フェリチン高値例ではフェリチン値は治療効果によく相関した。

27. 新しい腫瘍マーカー、Tissue Polypeptide Antigen (TPA) の基礎的および臨床的検討

柳 真佐子 曾根 照喜 大塚 信昭
福永 仁夫 森田 陸司 (川崎医大・核)

悪性腫瘍患者の血中 TPA 濃度を RIA 系を用いて測定した。女性では、男性と異なり、年齢が増加するとともに TPA 値の有意の上昇が観察された。TPA の高値は乳癌の肝または骨転移例、肺癌、肝癌で認められた。正常値との overlap は、乳癌(術前)で 18%、肺癌で 11%、肝癌で 0% であった。CEA 値と TPA 値との間には何ら相関関係はみられず、互いに異なる性状をもった腫瘍マーカーであると考えられた。以上より、TPA は臓器特異性は少ないが、悪性腫瘍症例で高値を示し、しかも正常者との間に overlap が比較的少なく、CEA を併せ測定すれば、相補いあい、悪性腫瘍の良い指標となり得ると考えられた。

28. CA19-9 測定キットの基礎的・臨床的検討

阿多まり子 永井 郁子 多久和法香
栗田 久恵 篠原 功 飯尾 篤
浜本 研 (愛媛大・放)

今回検討した CA19-9 測定用キット、ELSA-CA19-9 キット、CENTOCOR-CA19-9 RIA キット、ともに同時再現性、回収率、交叉試験において良好な結果を得ましたが、日差再現性においては、やや不良の結果を得ました。インキュベーション時間は、短縮可能と考えられます。

臨床的検討においては、われわれが測定した健康者 52 例から cut off 値を 40 u/ml とし、その場合の悪性腫瘍疾患の陽性率は腺癌が最も高く、66.7% を示しました。

また、CEA 測定値との相関は認められませんでした。

29. β_2 -マイクログロブリン測定用キット (SD-8567) の基礎的・臨床的検討

久保 嘉彦 赤木 直樹 片岡みどり
(高知医大・放部)
沢田 章宏 沖野 知範 吉田 祥二
前田 知穂 (同・放)

二抗体法による β_2 マイクログロブリン測定用キット「SD-8567」について、標準曲線の変動、incubation 条件による影響、再現性、希釈試験、相関、回収試験などの基礎的検討と、若干の臨床的検討を行った。

結果は、(1) 反応回数が 1 回である。検体の希釈が不要。incubation 時間が短いなど、本キットは操作法が簡便であった。(2) incubation 時間は 15 分から 6 時間、温度は 0°C から 35°C、incubation 条件の影響はなかった。(3) 再現性、希釈試験、回収試験など、基礎的検討の結果は全て良好であった。(4) 良好な相関、精度、測定感度に優れていることなどを考慮すれば、臨床的に有効なキットであると考えられる。

30. 血清微量物質の安定性の検討——凍結融解のくりかえしによるプール血清の安定期間について——

宇佐美政栄 (岡山済生会病院・核)

プール血清の保存を、①小分けし凍結保存(凍結)、②測定の前凍結融解のくりかえし(凍融)、③室温保存、の血清について検討した。各保存状態の血清の安定期間